

## ごあいさつ

東京から南に約 100km~1,000km の太平洋上に点在する島々からなる伊豆諸島・小笠原諸島。豊かな海洋資源を活かし、時には厳しい自然環境のもとで特色ある風土と文化を育んできました。

今年は伊豆諸島が静岡県から東京府に移管されて 140 年、また第二次大戦後、連合軍総司令部、のちアメリカの施政下に置かれていた小笠原諸島が日本に返還されて 50 年という節目の年に当たります。

この企画展では東京都公文書館が所蔵する、島々の風土や文化に着目した江戸期の地誌類や絵図をはじめ、江戸~明治初年の流人帳、東京府移管前後の行政記録等をご紹介します。伊豆諸島と小笠原諸島の歴史と文化に光を当てていきます。

展示構成は以下の通りです。

- I 島々への眼差し ~地誌が描く江戸時代の伊豆諸島~
- II 八丈島流人アーカイブズ
- III エキゾチックな観光地の成立
- IV 無人島から小笠原諸島へ
- V 伊豆諸島と小笠原諸島の文化財

今回の展示を通して島々への関心が高まり、今取り組まれている産業振興や観光にも注目が集まることを願うものです。

平成30年7月

東京都公文書館

## I 島々への眼差し ~地誌が描く江戸時代の伊豆諸島~

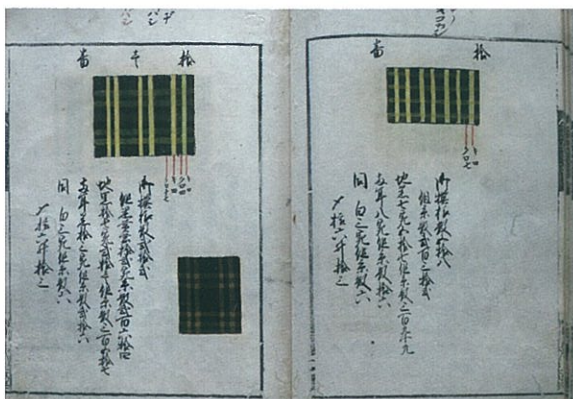
江戸時代、伊豆諸島は幕府の直轄領となり葦山代官の支配下となりました。流人の地として知られた島々は、江戸向けの商品生産地としてもつながりが密接になり、島への関心は高まってきました。

さまざまな地域を訪れ、比較文化的な考察を加えた地誌・紀行文が数多く出版された江戸時代には、太平洋上に広がる伊豆諸島を対象とした書物も数多く編さん刊行されています。そこには、島々の地理関係、珍しい動植物、人々の生活と生産活動、踊りや島相撲、牛合わせといった民俗行事が克明に記され、貴重な情報を今にもたらしているのです。

このコーナーでは、東京都公文書館が所蔵する数多い伊豆諸島関連の地誌を紹介し、当時の伊豆諸島のすがたと、江戸の出版文化人が島々に向けた眼差しに光を当てていきます。



▲七島日記巻三



▲八丈実記三十三



▲七島巡見志



▲伊豆七島全図

## II 八丈島流人アーカイブズ

徳川政権のもと、法制度の整備に伴い、伊豆諸島は流刑地として位置づけられます。

伊豆諸島へ流されるのは武士や僧侶、知識人が多く、新たな知識・技術・情報をもたらす存在として歓迎されました。また、仕事に就かせたり、島民と生活を共にするなど、島を抜け出さずとしない限り、緩やかな措置がとられていました。

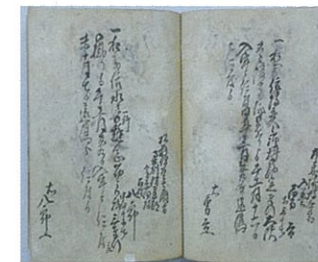
その一方、当初より島の支配を担った代官や手代ら島役人のあとを請け、島出身の地役人や村役人らのもとで、流人の管理は徹底して行われています。江戸・三宅島(中継地)・八丈島において、文書をもって流人の管理・引き渡しが行なわれ、それに伴って膨大な文書が作成・授受・保存されました。

高度な文書による行政・経済システムが発達し、文書社会ともいわれる江戸時代、“絶海の孤島”でもそれは貫かれていたのです。

このコーナーでは、島役人(島会所)のもとに蓄積され、現在の八丈支庁へと受け継がれた、いわば“八丈島流人アーカイブズ”と呼べる文書群についてご紹介します。



▲赦免船(「八丈実記」三十六)



▲流人科書



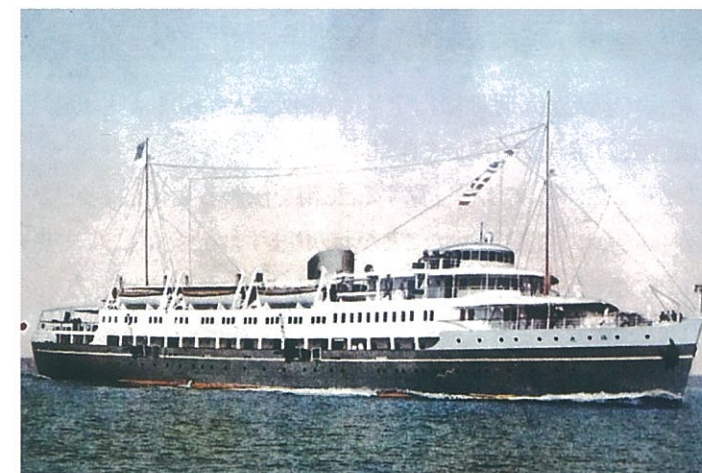
▲八丈島民政資料  
(東京都指定有形文化財(古文書))

## III エキゾチックな観光地の成立

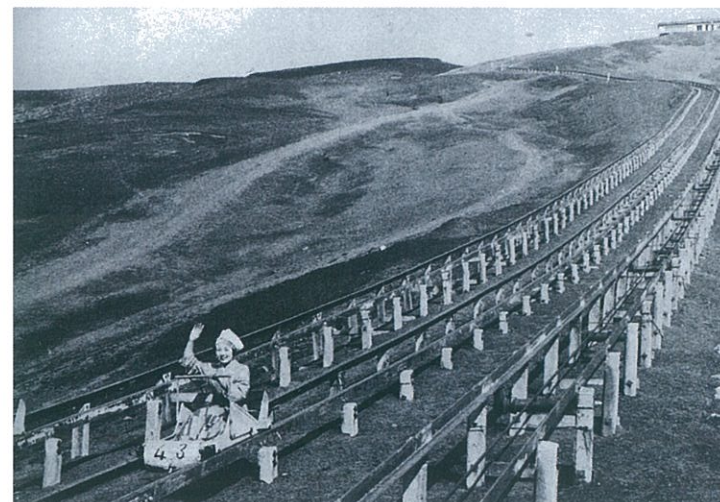
明治40年(1907)5月、東京湾汽船(現在の東海汽船)は東京府知事との契約により、東京と伊豆諸島を結ぶ「命令航路」を開設しました。同43年には八丈島、翌44年には青ヶ島への船も就航し、伊豆諸島全域にわたる航路が完成しています。

もっとも近い大島には寄港回数も多く、大正から昭和初年には多くの文人や画家が訪れました。

伊豆-大島間に毎日汽船が就航するようになった昭和3年(1928)以降、手軽に楽しめる南国情緒あふれるエキゾチックな観光地として、大島は高い人気を集めました。火山口探検ツアー、砂漠の駱駝、三原山の傾斜を利用したスライダーなど、魅力的な観光名所の様子をご紹介します。



▲優秀客船橋丸



▲コースター



▲三原山の駱駝

このコーナーの画像は樋口秀司氏の提供による。